

学生紡ぐ日米の絆

京の舞台で意見交わす

会議は満州事変で悪化した日米関係を憂慮した日本の学生が1934年に発案し、太平洋戦争などで2度中断しながらも続けられた。故・宮沢喜一元首相やキッシンジャー元米国務長官も参加者だ。

日米両国の大学生らが、国内各地で合宿しながら交流を深める「日米学生会議」が京都で催された。毎年、両国で交互に開かれ、今年で65回目。3日から京都市内を巡っていた一行は7日、次の訪問地の長崎に向かった。

今年には日本から35人、米国から36人が参加した。立命館大びわこ・くさつキャンパス（滋賀県草津市）で共に寝泊まりし、世界遺産の下鴨神社（左京区）などを見学した。長崎市では原爆資料館を見学し、9日の平和祈念式典にも出席。その後は、東日本大震災で被災した岩手や東京などを24日まで巡る。

期間中、学生らは「アジア



下鴨神社の参集殿で和食を味わう日米の学生たち（左京区）

80年の歴史「築いた関係、生きてくる」

太平洋地域における日米安全保障「マイノリティ」と差別」など、七つの分科会ごとに英語で議論を重ねる。意見の違いや合意の難しさを体験しながら、政策提言などをまとめる。

日本側の実行委員長で東京芸術大大学院の竹内正人さん（24）は、「バックグラウンドの違う人同士がぶつかるのは当然のこと。相手を尊重しつつ、意見の衝突を楽しみたい」と話す。

会議の同窓会副会長の竹本秀人さん（71）は、大学3年生だった1964年、米国で開かれた第16回会議に参加した。「日米関係が順調なときはもちろん、きくしゃくしてしまったときにこそ、ここで築かれた人のつながりが生きてくる」

近年は、米国での会議開催中に現地で学ぶ中国人留学生との議論の場が設けられるなど、交流の幅を広げているという。

米側の実行委員長でハーバード大のポール・ヤラベさん（22）は、被災地を早く訪ねたという。「現地をこの目で見て、自分が学んできた生物学の知識などを復興に役立てられないか考えたい」と語った。

（佐藤剛志）